

未来を拓く

居場所ハウス

いばしハウス

第3回

ただでであった人同士が徐々に顔見知りになったり、思わぬ人と居合わせていたことに気づく、という状況が生まれる。

大船渡市末崎町の人口は約4400人であり、父母が、祖父父母が末崎町民という人も多い。そのため「私は〇〇さんと親戚」、「〇〇さんと〇〇さんは兄弟」という会話をよく耳にする。

けれども、当然ながら全住民が顔見知りというわけではない。何十年も別の土地で暮らしていて、退職してから末崎町に戻って来た人もおり、そういう人が居合わせた人と少しずつ顔見知りになっていくこともある。また「ああ、〇〇君のお母さん。どこかで見たことあると思った」、「〇〇さんだよな?」どこか面影あるね。〇〇さんの同級生で「しょ」という会話のように、居合わせた人が家族や知人の知り合いだったという出会いもある。このように「居場所ハウス」がきっかけで地域の中で広がりのある関係が築かれている。

ある日のエピソードを紹介したい。午前中やって来たAさんは、「最近、Bさん来ないなあ」とBさんのことを気にかけていた。そのBさんは、Aさんとすれ違いに午後からやって来た。「Aさん、最近来て

り、話をするようになった2人である。2人は頻繁に「居場所ハウス」にやって来るため、姿を見ない日が続く。周囲が心配するという状況も生まれている。

互いに気遣い合う2人と、その2人の関係を見守る周りの人々。このような広がりを持った関係は、組織化された関係に比べると弱いかもしれないが、災害時にまず一緒に行動するのは、遠くに住む同じ組織の人でなく、同じ地域に住む人々である。弱くとも広がりのある関係が築かれている地域が、災害時や災害からの立ち直りに強い地域と言えるのではないだろうか。加えて、「居場所ハウス」の周囲では現在、高台移転のための土地の造成工事が進められている。「居場所ハウス」が、周辺に新たに転居してくる人が広がりのある関係を築いていくきっかけになればと思う。

「居合わせること」がすべての始まり 場が持つ無限大の可能性

居合わせた人との会話から、思いがけない方向に話が展開していくこともある。ひな祭りを企画した時、あるスタッフが、文化の継承のため昔から伝わるひな人形を展示したいとメモに書いたところ、メモを読んだ女性が「うちに70年前の泥人形あるよ」と言って、高田人形と呼ばれる今となっては貴重な土製の人形を持って来てくださった。「うちはお金持ちじゃなかったから、毎年一つずつ買ってもらった」人形だとのこと。この人形を展示していたところ、それを見

た別の女性も「長屋のどこかにしまっている」と高田人形を持って来てくださった。喧嘩をしないようにと、祖母が毎年、姉妹それぞれに一つずつ買ってくれたとのこと。今回、何十年かぶりに長屋から出したそうので、「おひなさんも、みんなに見てもらって幸せだなあ」と女性。

こうして、思いがけず貴重な高田人形を展示することができ、それにつながることもできた。

繰り返しのなるが、「居場所ハウス」は公民館や集会所のように、会議や教室の時にだけ訪れる場所ではないため、様々な人々が、様々な目的を持って訪れる。時には何らかのきっかけで居合わせた人同士の会話が始まることもある。そこから広がりのある関係が築かれたり、思いがけない方向に話が展開していくこともある。地域の人々が居合わせることでできる場所があるからこそ、生み出されるものは多い。

【注】※1 「居合わせる」とは「別に直接会話をするわけではないが、場所と時間を共有し、お互いどの様な人が居るかを認識しあっている状況」のこと(鈴木毅「体験される環境の質の豊かさを扱う方法論」・舟橋國男編(2004)『建築計画読本』大阪大学出版会)。

ロー・田中康裕



そして、最初は居合わせる(※1)。

90代の女性・Aさんと80代の女性・Bさんも「居場所ハウス」で顔見知りにな

現在、「居場所ハウス」の周辺では高台移転のための造成工事が進められている(上)。持参して下さった高田人形を見ながら、思い出話をする人々